

「不惑」の中国若手研究リーダーたち

胡 振江

孔子の言葉に「四十而不惑」とある。40歳に達すると、狭い見方に捕らわれることなく心の迷いがなくなるということである。40歳を迎えた研究者は、心の迷いがなくなることもよき、むしろこれからどうすればよいのかを考えることが大切であろう。研究に関して言えば、これまでの研究を一層発展させ体系づける、研究成果を産業界で実用化する、研究グループの形成に力を入れる、戦略研究のリーダーとして活躍する、などを考え直す時期である。

私は、1992年に文部科学省の国費留学生として中国から来日し、東京大学で15年間を過ごし、40歳にもなった。近年、日中共同研究プロジェクトや学生交流プログラムなどに携わり、中国を訪問する機会が増えている。同行する日本人の先生方によく聞かれるのが「中国の情報系では40歳前後の若手研究者がどうしてこんなに活躍できるのか？」である。

確かに、北京にある北京大学・清華大学、上海にある復旦大学・交通大学のような中国トップ大学の情報科学・工学に関する研究科では、40代の若手研究者はトップの指導者として活躍している。日本の40代の若手研究者と比べると、彼らが重任を負い「不惑」であることが印象的である。彼らは「科学技術攻関プログラム」や「863プログラム」などの国家的・重点的研究プログラムの専門委員として、情報分野における国の研究領域や方向性などを定めている。また、大学や研究機関における国家重点研究室のリーダーとして基礎研究・応用研究を強化し、新しい情報分野の探求を促進するとともに優秀な人材を養成している。さらに、ICSEのような著名な国際会議を中国で主催したり、チューリング賞の受賞者 Andrew Yao を清華大学の専任教授として雇用したりするなど、世界の最先端との距離を縮めようと懸命に努力している。

私と同じ研究室出身の一学年上の先輩である梅教授は、北京大学信息科学技术学院院長を務めている。彼は、若い院長としてこれまで色々な政策を打ち出してきた。やる気に満ちた彼は話す。「中国と世界との差は大きく、やらなければならないことは一杯あるが、チャンスも一杯ある。北京大学信息科学技术学院を世界一流の研究機関にするためには、問題のある古いシステムを思い切って破棄し、新しいシステムを導入しなければならない。保守的ではだめで、失敗を恐れず勇気を持ってやっていくことが重要だ。」現在取りかかっていることのひとつは、信息科学技术学院における博士学生の指導資格についてである。実はこれまで中国では、「教授・博士生导师」という分かりにくい称号があり、准教授・講師のみならず一部の教授も自分が指導する博士学生を持つことができない

というルールがあった。梅教授は、このルールを廃棄し若い教授・准教授が博士学生を指導できるシステムを導入することで、若手研究者を支援する環境を作ろうと考えている。このような若手研究リーダーのすばらしい活躍ぶりは日本でもアメリカでも信じられないほどである。

中国の40代の若手研究者が重用されたのは「天任」であろうか。1966年から1976年にかけての中国の文化大革命において、当初は学者や医者などの知識人などが弾圧の対象となり、大学は閉められた。大学入試統一試験が再開されたのは1977年の末になってからである。こうした事情により、中国の50代の人々は大学に入れずもともと彼らが活躍すべき場を40代の人々に譲ってしまい、40代の人々は他の年代の倍のチャンスを得る幸運に恵まれたわけである。

一方、彼らはすべて「一帆風順」ではなく、戸惑うこともある。まず、グループ研究を順調に進めるため、資金（科研費や企業からの研究委託金）の獲得に個人研究以上に多くの労力を使う。研究チーム内の研究者や大学院生が研究に集中できるよう、彼らに対する経済的な援助が必要であるからである。次に、優れた学生に研究チームに参加してもらうため、魅力的な研究環境を作らなければいけない。今の中国では、優れた学生が海外留学を希望する傾向が非常に強い。最後に、管理業務に多くの労力を割かなければならないため、実質的に彼ら自身の研究や頻繁な学生指導を行うことができない。優れた研究者が研究できないことは残念なことである。

本題から離れるが、日本では、若手研究者が研究に集中し優れた研究成果を世界に発信し、高く評価されている。科学技術振興機構の戦略的創造研究推進事業のひとつである「さきがけ21研究」プログラムなど、若手研究者を支援するプログラムもある。一方、若手研究者が領域総括となり国の戦略的重点分野において研究を推進することはあまり多くはない。もちろん若手研究者に研究リーダーを任せることには小さくないリスクがあるだろうが、ベンチャー企業へ投資する気持ちで重任を若手研究リーダーに負わせることで、研究方向性・研究方法・研究評価に新しい風が吹き期待以上の成果があがる可能性も潜在するはずだ。

研究者として世界トップレベルの研究に集中すべきか、教育者として人材の育成に力を入れるか、戦略家として研究グループの形成・運営を行うか——これらの選択は置かれた環境と個人の資質に依存するが、そのバランスを取ることが40代の若手研究者にとって大切なことではないかと思う。

(こしんこう / 東京大学)